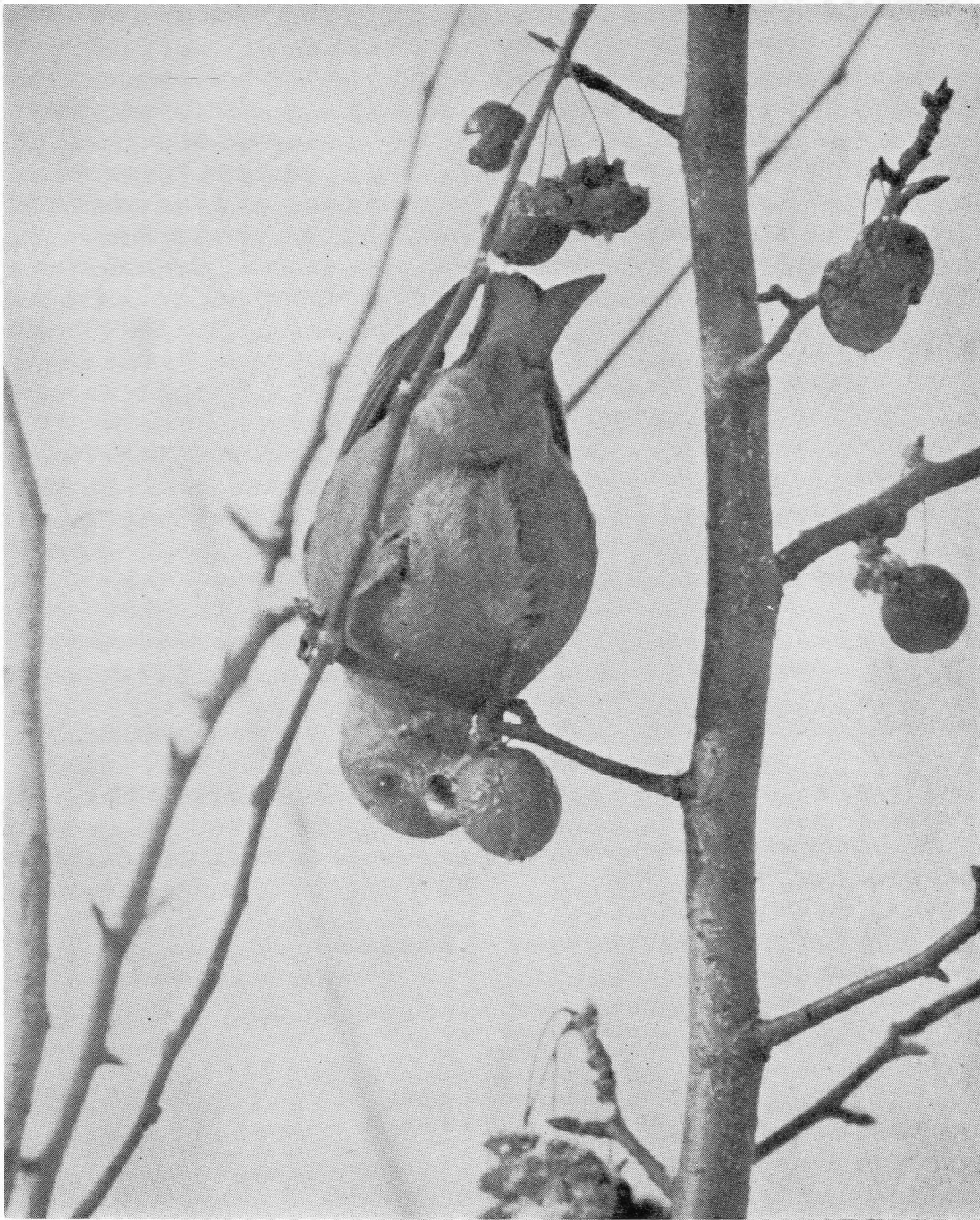


野鳥たけり

—北海道—

第 13 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和48年2月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



ギンザンマシコ 女 札幌市白石区にて 昭和48年1月13日 撮影 小堀焯治



ガンにとってのウトナイ湖の重み

昭和45年からはじまったガン・カモ・ハクチョウ類の調査が、今年も1月16日に全国一斉に行なわれた。このデータはすでに環境庁に集められ、集計作業がなされている。この調査の目的は日本で冬を過す水鳥の数や動態を知り、これからの保護対策に役立たせようというものであり、北海道ではとくに水鳥の少ないところであるが、全国一斉ということで鳥たちの移動の少ない時期が選ばれているのである。

■5,000羽 しかないガン

過去3年の調査によって、日本で冬を過すガンはわずか5,000羽ほどであることがわかった。これはオオハクチョウの数の半分にもならず、非常に少ないといえる。また、ガンの越冬地はほとんど完全にわかっているからこの数字の信頼度はかなり高いものである。

これらのガン（多くはマガンとヒシクイであり、コクガン少数が含まれる）はすべて日本には冬鳥として渡ってくる。渡りのルートはまだくわしくわかってはいないが、マガンとヒシクイについては、ほとんどが北海道を経由してシベリア方面と本州とを往き来していることはたしかである。そして、北海道でガンが見られる場所や飛んでゆく方角などから考えると、北海道のガンのおおる経路にはオホーツク海と太平洋の沿岸を伝う東まわりルートと、勇払原野から石狩低地帯（それとあるいはサロベツと）を結ぶ西まわりルートがあると思われる。

■ガンの聖地としてのウトナイ湖

とくに西まわりルートは、春北へ帰るルートとしてより多く使われているらしい。本州の越冬地を出発したガンの群は津軽海峡を越えて苫小牧付近から北海道に上陸し、ウトナイ湖や弁天沼をはじめ、散在する湖沼や沼沢地で旅の疲れを休め、エネルギーを補給してから日本海を越えて行ったのだという。

しかし、勇払から石狩にかけての地帯は北海道でも最もよく開発による変化を受け、これからも受けるところであろう。また、石狩平野は全域開発され、石狩川も改修がすすんで、すでにガンの休息できるところではなくなっている。空知地方の水田にはいまでもときにガンの大群がおりるといえるが、それはごく短い時間の休息に

しかすぎない。勇払原野にしても、多くの湖沼は干拓によってすでになくなり、弁天沼も苫小牧新港の掘込により姿を消してしまふ。将来も湖としてのこるのは、ただウトナイ湖ひとつだけしかない。

そのウトナイ湖に、いまもガンは立ち寄ってゆく。本会の早春の探鳥会では、いつも対岸に憩うガンの姿が観察されており、とくに去年は、飛立ったものだけで200羽ほどのヒシクイが数えられた。永くこの地方の鳥を観察している鳥獣保護員の宮崎氏によると、ウトナイでは2,000羽ものガンがみられたという。日本に来るガンがわずか5,000羽にすぎないことを考えると、この数字のもつ意味はきわめて大きい。

つまり、ウトナイ湖は日本に渡来するガンの、少なくとも半数が立ち寄るところであり、また、春日本海に出る前にガンがゆっくり休むことのできる場所として、のこされるただひとつの湖である、ということになる。もしガンの中に秋と春で渡りのルートをかえ、秋に東まわりを、春に西まわりをとるものがあれば、（渡り鳥の中にはこのように南下と北上で別のコースをとるものがめずらしくない）ウトナイ湖の比重はさらに大きなものになる。

ウトナイ湖は、道東の風蓮湖や湧洞沼と同じように、日本に来るガンにとってかけがえのない中継基地なのである。ウトナイ湖の価値を論ずるとき、このことはここに渡来する数百羽のオオハクチョウや苫小牧市明野にあるアオサギのコロニーと同列に、それどころかむしろそれ以上の重要性があることを忘れてはならない。

■築堤造成の計画

いま、勇払原野は苫小牧東部大規模工業基地として大きく姿を変えようとしている。第3期北海道開発計画の目玉商品であるこのプロジェクトが、四日市をあれほどまでに非人間的な都市にし、また建設途上の鹿島ですでに破綻をみせている重工業先導型の開発方式をとっていること、環境保全計画にそれ自身の主体性がみられないことなど、批判すべき点はあるが、いまはそのことにはこれ以上触れない。

ただウトナイ湖については、われわれはそこが緑地としてのこされることを知らされ、ほんとうに小さな面積

ではあるが、勇払原野とそこに住む生物たちの面影をとどめる場所が確保されることに慰めを見出していた。

しかし、情勢は必ずしも楽観できるものではない。ウトナイ湖に入る美々川流域の湿原は埋立てがすすみ、将来水質汚濁からまもられる可能性は少ないように思われる。また流出する勇払川の改修工事の一環として、湖のまわりに築堤をめぐるせ、湖を遊水池化する計画が道土木部によって確定している。しかも、それは早ければ来年にも着工されるという。計画担当者の説明では、この工事によるウトナイ湖の水位の変化はないそうである。だが、仮に周辺地区を増水期の氾濫からまもるために築堤の必要性を認めるとしても、われわれはこの工事が湖とそれに結ばれる水系、あるいは湖のまわりにひろがる湿原に与える影響を憂慮しないわけにいかない。

■減びへの暗い途

もしウトナイ湖の水位が湖の生態系に変化が生じ、ここがガンの休息・採食地として役に立たなくなれば、北海道西部のガンの聖地は一カ所もなくなる。また、デリケートなガンが、環境のわずかな変化によってウトナイ湖を見捨てることもないとはいえない。だが、先に書いたようにウトナイ湖は西まわりルートにのこる唯一の湖なのだから、ここが見捨てられることは、この渡りのルートそのものが潰滅することを意味するだろう。そうしてそれは、日本に渡来するガンが一挙に半減する事態をもたらす可能性さえもっている。わずか5,000羽のガンが半分になれば、疑いもなくガンたちは絶滅への暗い途をたどりはじめることであろう。

この推論はおおげさすぎるだろうか？

■苫小牧自然保護協会の要望

ウトナイ湖と美々川水系の保存について、苫小牧自然保護協会から昨年6月5日に北海道知事あての要望書が出されている。また、築堤工事については、同協会から昨年9月13日で道あてに要望書が出された。その内容は

- (1) 築堤は湖水だけでなく、湿原地帯も囲む方法とすること。
- (2) 湖の水位低下を防止するため、ウトナイ湖の吐口に水位調節堰をつくること。
- (3) 改修により切り替えられるいまの勇払川上流に、新勇払川から通水して、いまあるアオサギの採食地をまもること。

の3項目である。この2つの要望書にはガンの中継地としての価値はまったく触れられていないが、要望の内容は大筋で正しいと思われる。とくにガンだけでなく、まわりの湿原に住むシマアオジやオオジュリンのような湿

原性の鳥類のことまで考えれば、湖と湿原を分離することは最も良くないことである。勇払原野はこれらの、いかにも北海道らしい鳥たちの大きな生息地としては一番南にあるのだから、その一部はなんとかして保存の途を講ずるべきであろう。

■ウトナイ湖の保存に最大の努力を

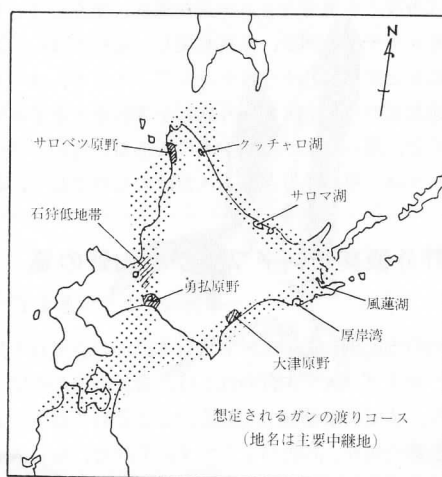
ガン——昔から日本人の心に深く根ざし、多くの人に親しまれてきたこの鳥は、いま天然記念物に指定され絶滅が気づかれるまでに減少してしまった。これまでガンを減少させてきた最大の原因である狩猟からはまもられるようになったが、環境の変化が今後はより大きな圧力となってガンたちの上にのしかかることであろう。

あかねさす夕空ががっしりと隊列を組み、よくとおる声で鳴きかわしながら渡ってゆくガンが、かつては多くの地方でみられたものだ。それは郷愁と未知の土地へのあこがれを強くそそる情景であった。

雄大な北海道の自然と人はいう。そして、その自然を生かしながら開発をすすめるともいう。だが、その開発がガンのようなすばらしい生きものを生かす場所さえ奪わざるを得ないのであれば、われわれにとって、また北海道にとって、いったい開発とは何であるのだろうか。

行政機関の各部局は緊密に連絡をとり、また学識経験者や自然保護団体の意見も求めて、ウトナイ湖周辺の生態系をまもるために最大限の努力をはらうべきである。

築堤の問題については、苫小牧自然保護協会の要望の線に添うほか、(1)築堤ができた場合のウトナイ湖と周辺湿原の水の経済を推算し、植生の変化を予測すること。(2)より根本的に、被氾濫地を買上げて原野として保存することにより、築堤をつくらずにすませることなどを考慮してよいのではあるまいか。



鳥のノート (3)

土屋文男

鳥の図鑑

この会報では図鑑の紹介記事が再三あったし、欧米の一部の図鑑については、私も書いたことがある。現在まで、ハンディな図鑑は少なかったが、日本野鳥の会が昨年発行した野外観察ハンドブック「山野の鳥」は便利である。62頁の小冊子であるが、内容は正確で豊富である。日常のバード・ウォッチングには大いに有用性を発揮する。日本野鳥の会に属している方はご存知のことであるが、定価300円、送料70円である。



野鳥の声

野鳥の声をおさめたレコードは以前からあったが、現在では各社とも優秀なレコードを造り、発売している。ジャケットや中の図版、写真も美しいものが多い。国内の鳥にとどまらず、オーストラリア、インド、ヨーロッパ連などの鳥もあり、海外旅行をされる時予め聞いておくと、思ったより役立つものである。鳥声レコードやテープは、単に鳥好きな人々だけのものではなく、職場

やデパートなどのBGM（背景音楽）としても十分価値があり、実際に鳥の声を流している所も多い。

テープではNHKの「季節の小鳥」などが便利で、カセット・テープは昭和46年10月に発売（6,000円）されている。以前売られていた100種の鳥の声を収録したオープンテープ（全4巻）とほとんど同様であるが、ウソ、エゾムシクイ、ミゾゴイの3種が加わっている。

最近ではテープ・レコーダーもカセット式のものが多いため、このテープは利用度が多い。

(医博・本会副会長)



野外観察ハンドブック 山野の鳥

—事務局でとりつぎます—

上掲の土屋副会長の文にある日本野鳥の会発行の野外観察ハンドブック「山野の鳥」は、会員の方から問合せがあり、すでに事務局で100冊ほどまとめて購入しましたが全部売切れ、好評のようです。それで、もし入手ご希望の方があれば、ひきつづき事務局でお取次いたしま

す。代金1冊300円を添えて事務局（12ページ参照）までお申込ください。送料はまとめて購入するので不要になります。

なお、整理の都合上、申込メ切を2月末日といたします。したがって、本をお届けできるのは3月10日ごろになりますのでご了承ください。

「風蓮湖を守る会」の発足にあたって

三 浦 二 郎

前号に「タンチョウの保護問題に思う」と題して、アメリカの鶴学者アーチボールド博士のレポートの要約が紹介されていました。アーチボールド氏がつづぎに調査されたタンチョウ繁殖地の一覧の中に繁殖拠点としてあげている釧路湿原と風蓮湖の二大繁殖地が、共に「開発か自然保護か」の論争の渦中にあることは、すでにご承知だと思います。

アメリカの学者に指摘されるまで、実は私を含めた地元の人たちでさえ、それほどタンチョウの繁殖地がおびやかされているとはっきり認識していなかったことは、誠におぼろしい限りです。私などは、別海（昨年までは西別といっていました町役場の所在地）から、厚床を経て根室ノサップまでのドライブで、車窓から10羽前後の姿を数えられ、その確認数だけで何となく安心していたものです。

彼等の棲息地が開発の名（とくに根室中部新酪農村建設）によって破壊されようとしているとは、新酪の中心地である上風蓮で勤務しているときでさえ気づきませんでしたし、まして現在の学校（風蓮川の最上流地点）に転動してからは、タンチョウの棲息地から離れたこともあって、ほとんど関心を持たないまま過ごしていましたが、実はその2～3年の間にタンチョウの棲息環境がひどく破壊されつつあったのです。

10月初旬、根室支庁林務課の主催による「野外自然教室」に参加させていただき、そのときの野外観察地点として風蓮湖が選定されましたので、意識をもって風蓮湖を観察する機会を得ました。

ちょうどその日、根室の鳥獣保護員の岡清松氏が、冬の給餌のための餌づけのトウモロコシを播いておられましたが、これもアーチボールド氏の提唱された保護活動の一環として試みられたことのようにでした。根室地方に棲息するタンチョウも、冬には釧路地方の給餌場に餌を求めて移動するようだが、風蓮湖でも給餌すれば居つくようになるのではないかという提唱です。

そのときの岡氏の話ですと、以前にはその地点春国岱には2番のタンチョウがいたが、今は1番しかいないということですから、すでに減少の傾向は現れているようでした。

さて、その日の座談会の席で「風蓮湖を守る会」を作ろうじやないかという話が持ち上がり、それがきっかけとなって近々会が発足することになりました。タンチョウを守るということは、その棲息環境である広大な湿地

帯を確保することなので、会の活動もそれなりにかなり幅広いものになるだろうと予想されます。愛護会の皆さんのご支援をお願いします。

ところで、アーチボールド氏のレポート全文は、日本野鳥の会機関誌「野鳥」9月号に掲載されましたので、お読みになられた方が多いと思いますが、レポート本文でなく、レポートの和訳をされた永島氏の「アーチボールド氏との出遭い」という文の中に「アジア大陸にも多少タンチョウは残っているらしくカンダ湖畔で繁殖しては越冬のために朝鮮半島へ渡る模様であるが、朝鮮での乱獲は言語に絶するものがあり、今年は僅か4羽が見られたに過ぎず……云々」というくだりがありました。

私は朝鮮京城で生まれ育ち、朝鮮での鳥について楽しい思い出がたくさんありますが、この一文ですっかりしよげ返ってしまいました。同級生の一人は、昨年訪鮮したらしく「もう思い残すことはない」なんて大げさに喜んで年賀状に書いてよこしましたが、私は、日本よりもひどい自然破壊のようすが想像されて、何となく訪れる気持にはなれないであります。

しかし、その反面、古い朝鮮時代の野鳥ノートを持って訪れ、ノートの記録と現状とを自分の目で確かめて照合してみたい気持もあります。今年のタンチョウ一斉調査ではいままでの最高数だったようですが、222羽がピークではありたくないものです。（別海町在住）



イスカの来訪

新宮 康生



昨年の12月3日野幌森林公園での所謂「百武教室」の探鳥会とき、育種場本館裏の松の木で熱心に松毬の中の実を啄んでいるイスカの♂1羽と♀2羽を見ることができた。身体全体が赤い色の♂がオリーブ色の♀を従えて松の木にとまっている姿は非常に美しく、また「イスカの嘴の喰違^{ハシ}い」と物事の例えにもいわれている喰違った嘴もかなり近くに見ることができて、はじめて見たせいもあってか強く印象づけられた。

その後2回ほどその付近を通ったが、「彼等」に出会うことはできなかった。暮の26日の夜、家内が「今日庭に赤い色の鳥が来ていたけど何でしょう」と言った。とたんにイスカの♂を思い出したが、同時にマサカと否定もした。イスカの好む松の木一本ない我家のせまい庭に間違っても彼等が来るとは思えなかったのである。12月29日の朝、待望のキレンジャクの第1陣約20羽がちょっと寄り道をしてリンゴをつついて行った。元気で帰って来たなと思いつつ飛び去った後で庭に出てみると、イタッ。

まぎれもなくイスカである。白樺にぶら下げたあるトウキビをむしっている。♂が1羽と♀が2羽。家内が先日見たのもやはり「彼等」だったのだ。

早速出勤時間ギリギリまで写真を撮った。

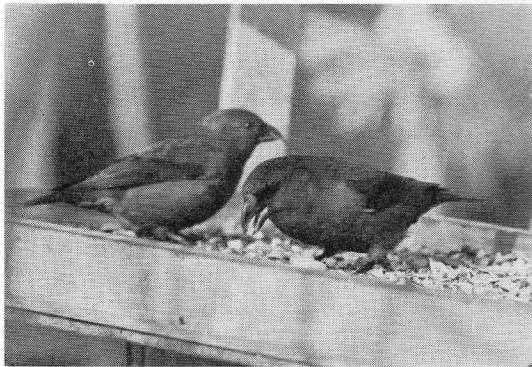
元日の朝、おだやかな正月だなと思いながら外へ出てみると、「彼等」の数が増えている。♂が2羽、♀が3羽、さらに♂の幼鳥らしいのも1羽いる。よく見ると♂も♀もそれぞれに色の違いがあり、鮮かなのからくすんだのまでさまざまで、1羽ずつ違っているのには驚かされた。特有のキョキョ、キョキョという鳴声を交しながらトウキビを啄んでいる。

ところでこのトウキビであるが、秋に親類からもらって来たのを、「ひょっとしてキジでも来てくれるかな」と思い、つるしておいたものである。よもやイスカの給食になるとは思ってもいなかった代物である。

「彼等」の来訪は毎朝7時ごろである。1羽で来るのもいれば、3~4羽で連れだつて来るものもある。飛来すると先ずお向いの酒井さん(会員)の庭にある松の木に入り、小休止である。各自休憩する場所が定まるまでキョキョ、キョキョと鳴き交しながら松葉の中を動き廻っている。一休みが終ると庭木につるしてあるトウキビや餌台のヒマワリの種をつつきにやって来る。「彼等」の食事のマナーであるが、先ずトウキビ1粒をその穀からあの独特の嘴でつまみとると別の枝に移り、これを足でおさえて穀についていた比較的やわらかいところだけを(または脂肪分の多いところか?)食べて、黄色い硬いところは捨ててしまう。見ていると誠にもったいない。1粒ずつこれをたんねんに繰返している。かなりの浪費家のように、手持のトウキビはいつまでもつかなどという当方の心配などいつこうに頓着なく、どんどんトウキビを裸にしていく。ヒマワリの種の場合は喰違った嘴でかみ割り中身だけを食べている。この方が好きなようだ。試しに麻の実をまいてみたがこれは嫌われた。また水代りであろう、枝上の雪を大口を開けてバクバクやっている。

食事の追かけ合い、つつき合いはしょっちゅうで、皆かなり気の強い連中である。ミカン色をした幼鳥は大人たちの後を追ってはつかれていた。スズメたちもかなり追いちらされていた。一しきり食べ終るか、人に驚かされると向いの松の木に帰って一休み、またやって来るという動きである。松の木の持主の酒井さんでもリンゴやヒマワリをせせせとやっておられるので、酒井さんと我家の間を行ったり来たりである。もともと庭は酒井さんの方がずうっと広いので、「彼等」は多分あちらの方が食べ心地が良いであろうが――。

1月9日に鳥類保護連盟の柳沢さんと会員の羽田さんが見えた。幸い天気もよく数も10羽に増えホッとした。次で13日本会幹事の百武さん、萩さん、内藤さん方が見



えたが、このときも3羽、♀8羽で天気もまあまあ、寒い中で熱心に写真を撮ってお帰りになった。

このとき百武さんがソッと1羽に近づきその尾羽根に手を触れて「イスカにサワツタ男」となった。あまり人をおそれない鳥である。

15日の休日に、「彼等」の中にナキイスカらしいのを見出した。♀である。後方から見ると逆八字型に2列の鮮かな白線が入っている。早速写真を撮った。大きさ、行動などはイスカとまったく同じであるが、鳴声はや

や大きく、濁っていた。17日夜家内が「今日イスカの♂で逆八字型の白線が1列くっきりとあるのを見た」と言う。百武さんのお話ではイスカに白線の入ったのもいるようなので、これかもしれない。今後の観察課題とした。今年の正月休みはイスカとのつき合いでおいに楽しませてもらったが、これからいつまでいてくれるのかなんとか餌を絶やさないようにしたいと思っている。

(札幌市白石区北郷在住)

給餌の誘い

～団地住いの方へ～

中 畑 勉

大麻団地と言えば、札幌近郊の方ならたいご存知のことと思います。野幌原始林の北側に近接しているところから、道内一、二を争う大団地であるにもかかわらず、今のところわりと自然に恵まれていて、一戸建ての住宅などでは、その庭木にモズが営巣したなどというはなしも昨年の新聞紙上に報道されたほどです。

しかし、我家のようにアパートだけがたち並ぶ地区では、そんなはなしも同じ団地内のこととは思えないようならやましい限りのことで、多くのカラ類がおりてくる冬期間でさえ、運のいい年であればアパート屋上あたりを飛翔するレンジャクの小群を見るくらいのものであります。ところが、ここにもう一種類だけ、しかも一年中住まってくれる小鳥がいました。スズメと聞いてがっかりしないで下さい。彼らも良く観ると、他の鳥にはみられないなんとも言えない良い色彩を持っています。

とくに石炭をあまりかなくなった最近の宅地に住むスズメは、市街の真黒けのばい煙スズメと違い実にきれいな色をしています。また餌場でみせるマスゲームの楽しさは格別と言えましょう。我家では、バルコニーにミカン箱を利用して屋根を付けた餌台を設けております。これなら降雪のためにおっくうになって、給餌を欠かすという心配もなく「冬のあいだ給餌をつづけることができる見通しのないときは、最初からはじめるな」という多雪地方における鉄則も守れるわけです。

そして、飼い鳥を飼っている方であれば、その籠を、餌台のそばに一緒に出しておこうものなら、そのひょうきん者が訪れるのは、時間の問題と言えるでしょうし、残り餌は彼らの申し分のないごちそうとなります。その他に、ご飯粒やパンくずも良く食べますが、あまり好まないような残飯でも、雪夜の翌朝となると、うって変っ



てにぎやかにうばい合うという現金なところもまた、なんともかわいらしいものに思えます。

これほど人間と密接した生活をしている野鳥は、スズメぐらいだといえますが、意外にもそのスズメの生態写真が少ないそうです。アパートのバルコニーに毎日スズメが訪れるようになると、彼らも住宅難のおりから、案外そこに架けた巣箱を利用するかもしれません。となれば望遠レンズなしでも、三脚とエアレリーズで良い写真が撮れることでしょう。

そして、次には、少しの樹木さえあればわりと簡単に餌付けのできるキレンジャクなども、多くの人々の熱意で、アパートの餌台まで呼び寄せることができるのではないのでしょうか。

(酪農大学学生)



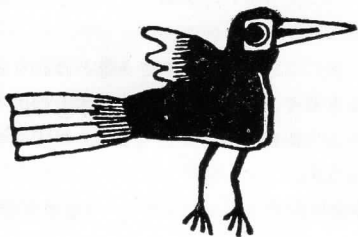
鳥語 (4)

三浦五郎

元旦はヤマガラ、2日の朝にはエゾヒヨドリが庭にやって来た。エゾヒヨドリはナナカマドの実を食べによくやって来たが、ヤマガラは初めてであった。彼とは暫く会っていなかったが、少年時代から極く親しい間柄であったから、彼の素性は大抵知っているといっている。ヤマガラは利巧で愛嬌がある芸人である。ファーブルも「ヤマガラやミソサザイやヒワをご覧ください。彼らはフランスの小鳥のうちでもいちばんのちっぽけな奴でいてしかも比類のない芸術家だ。」(岩波文庫 ファーブル昆虫記第19分冊 山田吉彦訳 131頁)と称賛している。ただ彼は好奇心が強過ぎるのどすく馴れ馴れしい態度をとるのは感心できない。前号でクロツグミが残飯整理役であるのを軽蔑の眼指して眺めるアパートの住人がいると書いたのは、ヤマガラやメジロのことで、いささか彼等のために弁明し過ぎた。

実際はそうではなくて隣人が何を食べているかを覗いていたわけであった。なにせ、古いよしみもあったし、私はせいぜい釣瓶上げだけであったが、なかには宮参りやおみくじ引きを餌でつって仕込んだ人間がいて、そういった過去の罪のうしろめたさで少々へつらつて筆を曲げてしまったのだ。彼に麻の実やクルミやドングイ虫などを与えると、器用に両脚の間にはさみコツコツ嘴で割るようにして食べる。満腹になっても与えるだけ指先から取って行って、なげしの際や籠の隅とか紙の下に隠匿する。だから隣のクロツグミがどんな食べ方をしたって、非難めいた顔をできるわけがなかった。元旦早々せっかく挨拶に来たヤマガラに説教をするようで悪いが、大体竹ひご越しの覗き見趣味は余り品のいいものではなかったのだ。

彼に会いたい時は、秋にカシワナラの林に行くのにかぎる。梢でどんぐりを両脚に押え込んで、コンコン叩いては中にある虫の幼虫をあさっている。地鳴きはシーン



ーだが、時折ピーピーという声を聞くことがあった。奴さんがどんぐりの中の獲物が少なく、腹を立てていると思わせる苛立たしい声であった。それともキツツキの鳴き真似をして彼の収穫にあやかろうとしていたのであるらか。繁殖期になるとツツピーツツピーになって、たまにはピーポーピーポーと囀ることもあった。中学の3年の半ばで家が転勤で引越したあと、私はヤマガラと一緒に学年が終るまで室蘭に残った。春になってこの地を去るとき、辞書や参考書をしまい込んだリックを背負い、マントを着た片手には丈の高い大きなヤマガラ籠を下げ、汽車に乗ってから彼のためにも席を一つとってやった。

予て、室蘭に冬枯れの時期を選んで画きたいと思っていた所があって、3日に年賀状を書き翌日そこに出かけた。時々展覧会で同じ場所を画いたのに出会うことがあってもみな夏の風景であった。私が40年程度前夏と冬に画いたことがあったが、冬の方がずっと好きであった。バスの終点からだらだら坂を上りヤマガラ沢を過ぎ絵道具袋をぶら下げて、ゆっくり歩きながら少年時代の記憶を辿って昔の細道を捜す。笹藪を涉って崖縁に出たがどうも感じが違う。やっと思ひ出してウソ林を通り抜け急坂を息を弾ませて上る。カシワやイタヤモミジの林があって、ここの木々は風に吹き飛ばされないように大地にしがみつき、その根は表土が浅く地中に入りきれずに坂の小径の上に盛り上って這うように張っている。

少年時代ここをズック靴か朴歯の足駄を履いて駆け下りたことを思い出す。そして夏にはエゾクマゼミの出でくる小さな穴がないかと盛上った根元を注意深く歩いたことを懐しんだ。やっと思ひ出た崖の鼻に出ることができたが風がひどく眼下の潮騒は聞えて来なかった。水彩で一枚とウソ林を上の方からパステルで一枚画き、昔住んでいた清水町の方へ下りるのを断念して引揚げた。

街へ出て駅前通りから右折してちょっとした坂の途中に小鳥屋があった。この店は昔からあった店で、その頃我々は普段小遣を貰えなかったが、山から採って来たくみみこの店で一升10銭で買ってくれたので、自分の欲しい鳥を求めたものであった。昔は野鳥がたくさん売られていて、ベニヒワ25銭、マヒワ30銭、ヒガラ40銭、ウソ、ヤマガラが50銭、本州産のメジロが2円、ミソサザイは砂浴びの仕掛のついた籠に飼われていて随分と高い

値段がついていた気がする。当時はお焼きが1個1銭の時代であった。メジロを山で見つけようと苦労したのだったが見当らなかった。これについては後の機会に譲ることにしよう。

鳥の図鑑が学校の図書室にもなく、名前を調べるのはこの小鳥屋が電信浜の近くに住んでいた万太郎という鳥捕りに聞くより他なかった。万太郎は40がらみの独り者で無愛想であったから、学校の帰りに敬意を表しに寄っても上れとも言わず、ただ聞いたことをボソボソ教えてくれた。戸を開けると狭い土間の天井から吊下げた金

の籠にコゲラを飼っていた。成鳥を餌付けしたのか雛から育てたのか餌はどうするのか聞いたが教えてくれなかった。

秋晩く1メートルも飛ぶことができないヒガラが笹藪からチョンチョン出て来たのを手で捕え、少し飼っているうちに馴れて肩に止ってクルミの実をねだったりしたが、尾羽打枯したみすぼらしい姿がおかしく、独り者の鳥捕りの姿を連想させるものがあった万太郎と名付けてやった。

続・ヤマセミの観察

入江 智一

前回のヤマセミ撮影記に続いて、ヤマセミ観察の記録を發表いたします。

前回の観察ではヤマセミが飛来する時刻はだんだんと遠くなっていました。それから以後の観察でだんだんに飛来する時刻が遅くなって、私が初めてヤマセミの観察を行なった時間に戻っています。この現象で、私の気づくことは日の出の時刻に関係が深いと思います。それに前回の観察では毎日のように飛来していたヤマセミも最近の観察では2日～3日ごとに飛来しなくなりました。前まで一定の木の枝にとまっていたヤマセミも、人間を警戒したのか他の木の枝にとまるようになって、2羽いっしょに飛来することが少なくなりました。

ヤマセミの2羽の内1羽は雄の成鳥でもう1羽の方は雄の幼鳥であることがわかりました。この幼鳥からヤマセミが今年、千歳川の上流の方で繁殖したように思います。雄の幼鳥の特徴は雄の成鳥に比べ体の大きさがやや小さく、胸と脇にある栗色の斑点がなく、成鳥に比べ幼鳥の方は警戒心がそれほど強くないようでした。幼鳥の餌の採りかたは木の上から水面を見ていて、餌を見つけ

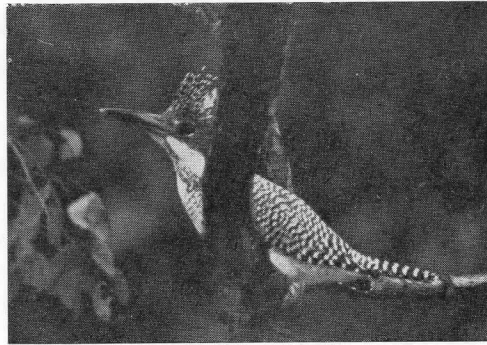
たと同時に、水面に向かって垂直に頭から水中につこんで行ってすぐまた水中から飛び立って、もとの木の枝に戻ることもあれば、別の木の枝にとまることもありました。鳴声は成鳥と同じ声で幼鳥も鳴いていました。これからもまた観察を続けていこうと思います。

(千歳高校2年)

ヤマセミの飛来時刻 (1972)

月 日	飛来時刻	飛び去った時刻	備考
10月13日	前5:45	前6:20	2羽
10月23日	前5:41		2羽
10月26日	前5:55		2羽
10月29日	前5:51		1羽
11月3日	前5:51	前6:05	2羽
11月30日	前6:35		2羽

ヤマセミのオス幼鳥 47, 10, 13 千歳川



野鳥保護閑話

小山 政弘

野山を歩くと、しばしば鳥の亡骸に出くわす。楽しげに梢で囀る初夏の鳥や、生きる迫れを感じさせる育雛中

の親鳥の姿を想い浮かべると、なかば朽ちたその死骸が一層無惨に見える。子供のころそんな動物の死骸を見つけると、必ず小さな墓をこしらえては合掌したものであった。

大学時代、実習で犬の不妊手術をてがけたことがあった。覚えての理論を初めて実践したわけだが、手術がほぼ完了するころに、一人の野次馬の友人が新しい電子メスでその犬の胸を切開してしまった。メスの先が誤まってほんの一寸心囊(しんのう)に触れたかと思うと、

一瞬にして犬は死に到ったのである。

私は、その一瞬の出来事のどこまでが「生」でどこからが「死」であるのかがまるで理解できぬまま、唯茫然と左胸に穴のあいた一頭の犬の死骸を眺めるだけであった。

以来、生と死に関する私の小さな哲学心は、たとえば動物標本を作るとき、交通事故の死者を見るとき、あるいは病死する知人を病床に接見するときなどには、ことごとく生と死の変曲点を見窮めることに集中したのである。

ところが、いつからかははっきりしないが、そんな関心が次第に薄れ、生も死も自然の同じ流れだと考えるようになった。

昨年10月、第二回千歳市民探鳥会に集まった数人の人達と一緒にウトナイ沼北岸を歩いた。既に下旬、オオハクチョウが4羽飛来しており、カモが数十羽集まっていた。美々川河口に向けて進んでいると、やにわに前を歩いていた幼い鳥仲間が驚声を上げて立ちどまった。寄ってみると、ハクチョウらしい一羽の白骨化した死骸である。真剣な目つきで死骸を見つめる子供達には、生も死

も自然の同じ流れ、という例の私の考えを語って聞かせさらに先に進行するように促したのだったが、歩き出した彼等の顔には割り切れない何かがあった。

昼食のときに、彼等の一人が思い出したように質問してきた。あの鳥が何故死ななければならなかったのかという疑問であった。私は、途方もない恥しさが身体を駆けめぐるのが覚えた。

自然保護の重要性に醒め、自分なりに自然保護を考え始めて既に10年にもなる。時には潜越でヘンチクリンな試案を発表したりもした。そんな自分が、あの時1羽の野鳥の死骸を前に彼等と自然保護の討論を起さず、なぜ妙な悟り口上を発したのだろうか。

昼食が終ると、幼い鳥仲間達は元気に食後の運動をはじめた。私は、おくれればせながら帰りの車中で起そうとする自然保護の討論の手順を、アレコレ考えはじめたのである。

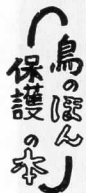
ウトナイ沼の水面には、相変わらず4羽のオオハクチョウと数十羽のカモの群がのどかに休んでいる。対岸の苫小牧東部工業地帯からは、大きな煙筒から大量の煙がいつはてるともなく吐き出されている。

> 会の財政重大危機に直面 <

47年度分会費の納入状況がきわめて悪く、本号発行時に会計がすでに大きな赤字になっています。足りない分を事務局員が私費を立替えて支払など行なっています。未納の方には振替用紙を同封しましたので、至急お払いください。なお、48年度から会費を値上げせざるを得ないと思われ、いずれ総会におはかりしますが、どうぞご協力をお願いします。

私設・野幌森林公園探鳥散歩

- ◇月日 3月25日・4月22日
- ◇集合時間、その他は未定です。同行される方は下記までご連絡ください。なお、中止または日を変えることもあるのでお含みおきねがいます。
- ◇連絡先 百武 充
TEL (昼) 231-4111-内線3895 (道庁自然保護課)
(夜) 江別 (01138)-6-4008



『ニールスのふしぎな旅』

セルマ・ラーゲルレーフ著

小人にされてしまったいじわるなニールス少年が、飼っていたモルテンというガチョウの背に乗り、ガンの群に入ってスエーデンをめぐる歩くうちに、正義感とやさしさをもった少年に成長してゆくという物語です。ラーゲルレーフ女史がスエーデンの少年たちのために書いたこの話は、またそこに登場するたくさんの鳥やけものすばらしい描写によって、ひとときわ輝かしいものになっています。じっさい、ここに出てくる動物たちは、なんと見事に生きていることでしょうか。この本を読んでいると、ガンたちは旅をしながらほんとうに地上にいる人間や、動物や木に向かって呼びかけているのではないかと思われてくるほどです。また、飛んでゆくガンの声を「わたしはここよ、あなたはどこ」と解釈したのは行動学からみても正しい、とK・ロレンツはほめています。ラー

ゲルレーフという人は、きっと、心から動物を愛し、やさしく、注意深い目を注いでいたのでしょう。

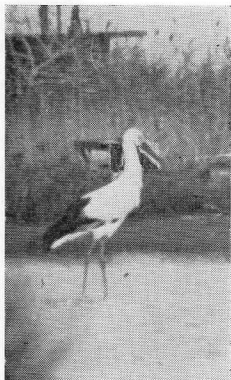
70年も昔に書かれたこの物語に、湖の干拓という自然保護の問題がすでに登場しているのには驚かされます。それと、ガンがニールスと別れるとき、「人間は強くてどんなことでもできるのだから、海岸や、岩礁や、湖や沼沢などを、わたしたち動物のために、少しはわけてくれてもよいのだ」といいますが、これは自然保護のたいせつな一面を示す言葉として、現代でも生きていると思います。翻訳は催成社と集英社から小学校低学年向きのが出ていますが、ともに完訳ではなく、上に引用したガンの言葉などはきれいに省略されて出てきません。完訳では主婦の友社のノーベル賞文学全集のなかに、メーテルリンクの青い鳥などと一緒に入ったのがあります。しかしたいへん残念なことに、この訳文は若い人たちには少しむずかしすぎ、また、文章もあまりよくありません。このすぐれた物語は、もっと美しい日本語に訳されるべきです。

鳥の記録 1972～3

◆勇払原野にコウノトリ

昨秋コウノトリが各地に渡来したことは新聞などに大きくとりあげられましたが、苫小牧の鳥獣保護員宮崎政寛さんからの報告をもとに次のようにまとめておきます。

勇払地方では昨年9月中旬ごろから「白い大きな鳥を見た」という話があったので、コウノトリはそのころから



来ていた可能性があります。その後11月4日には国鉄日高本線の気動車の運転士が、沿線の苫小牧市弁天にある通称伊藤沼にのっているコウノトリらしい鳥を見たと言われ、宮崎さんに連絡しました。宮崎さんはすぐ現地に急行しましたがこの日は確認できませんでした。

翌11月5日、宮崎さんは再び伊藤沼に行き、コウノトリ1羽を確認し、写真撮影にも成功しました。

このコウノトリはその後もしばらくは付近にいたようで、宮崎さんは11月12日に勇払川沿いで、11月26日には第一幹線排水路で観察し、その他にも植苗駅付近を飛んでいるのを見た人もあります。しかし、12月に入ってからはいずれも姿を見ていないようです。

なお、道外では11月16日に福岡で、11月24日に静岡で、11月28日に長崎で、それぞれコウノトリ1羽が発見されています。福岡と長崎のが同じ個体としても、北海道と合わせて3羽のコウノトリが昨秋大陸から迷行してきたこととなります。このうち、静岡にきたものは無法にも11月27日に密猟者によって射殺されました。また、コウノトリの別亜種であるシュバシコウが11月28日に静岡で発見されましたが、これは東京のデパートから逃げたものらしいということです。

◆コクガン

北海道では近年ほとんど見られなくなったコクガンがえりも町油駒で観察されました。観察者は様似町の佐藤辰夫さんで、47年11月23日と48年1月12日の2回記録されています。



◆カラフトアオアシキ

石狩川口で9月9日に1羽が土屋文男、松岡茂、羽田恭子各氏により観察され、松岡さんの写真によって確認されました。シギ類でとくに稀な種類の一つで、絶滅が

心配され、日米渡り鳥条約の特殊鳥類に指定されています。北海道からは2回目の記録です。

◆赤い鳥がいっぱい

昭和47年の秋は過去数年とはかなりはっきりした違いがみられました。石狩地方でこんなにたくさんのベニヒワがみられたのは何年ぶりなのでしょう。イスカやギンザンマシコのたよりがこんなに集まったことがあるのでしょうか。レンジャクも多いといわれます。報告が札幌中心になってしまいましたが、ほかの地方ではどうだったのでしょうか。

◇ベニヒワ

野幌森林公園付近 12月はじめに200羽くらいの群、その後分散し50羽以下の群がいくつも。 百武 充

羊ヶ丘北農試構内 12月3日初認 約50羽 四十万谷吉郎
白石区北郷 11月30日約20羽初認 1.15 現在まだいる。

スズメと一緒に採食しているものいる。 新宮康生
苫小牧市勇払 1月3日 5羽 宮崎政寛

◇イスカ

中央区円山公園付近 10月31日 約100羽、その後2～5羽の小群をたびたび。 羽田恭子

野幌森林公園 12月3月 ♂1 ♀2 新宮・羽田ほか大勢
白石区北郷 6ページ参照 新宮康生

その他、11月中旬に苫小牧などで保護収容されたものがあることが北海道新聞にのっていました。

◇ギンザンマシコ

円山公園付近 10月31日 イスカ群中に♂1 羽田恭子
野幌森林公園 11月12日 ♀1 新妻・羽田ほか大勢

南区真駒内 12月2日 ♀2 その後も。 新妻 博
江別市大麻団地内 12月10日 ♀1 百武 充

中央区南5西13 12月27日 ♂成1若1 ♀8 新妻 博
西区手稲 1月8日 ♀4～5 佐藤マサ

白石区 1ページ参照 小堀煌治
円山公園付近 1月20日 ♀3 溝部泰子・羽田恭子

10月の円山がマツにいたほか、すべてナナカマドかエゾノコリンゴの実を食べていたものです。オスが非常に少ない理由は何でしょうか？

◆その他の冬鳥の初認

ツグミ 9月30日 美唄市大富 藤巻裕蔵
10月10日 白石区米里 新宮康生

カシラダカ 10月8日 美唄市大富 藤巻裕蔵
10月20日 白石区米里 新宮康生

キレンジャク 11月28日 中央区円山 羽田恭子
12月6日 美唄市光珠内 藤巻裕蔵

12月29日 白石区北郷 新宮康生

◆夏鳥の終認

オオジシギ・ヤマシギ・ホオジロ・アオジいずれも11月1日に観察 10、15日には観察されず 羊ヶ丘 藤巻

札幌周辺の鳥類相調査の呼びかけ

小 川 巖

ここ2、3年、札幌市街でカッコウの鳴き声を聞く機会が少なくなったということをししばしば耳にします。この傾向はカッコウに限らず、札幌周辺の鳥類全般に当てはまるようです。市街地化に伴う緑地の後退が、大きな原因の一つであることは間違いないように思われますが、それではどの鳥がどの位減ったかということになると、これまで確かな調査が行なわれていないため、はっきりと示せないのが実情と言えます。このままの勢いで都市化が急速に進むとすれば、市街地のみならずまだ緑地がかなり残っている郊外からも、いろいろな鳥が姿を消す日もそう遠い先のことではないという危惧を感じるのは私一人ではないでしょう。

北大付属農場でかつて見られた、例えばシマアオジ、ホオアカ、アカモズ、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ノビタキ、ノゴマ、カワセミ、フククイナ、ヒククイナ、バン、オオバン、ウズラなどは、今日では全く姿を消してしまったか、そうでないとしてもごく少数しか見られません。その他の鳥についても一部を除いて、生息数は非常に少なくなっているようです。比較的人の手の加わることの少ない北大の農場でこんな状態なのですから、その他の場所はもっと顕著な減少が見られるのではないのでしょうか。それも50年前とか戦前の状態と比較してというのではなく、過去わずか10年間のできごとなのです。とくに草原性の鳥類の減少は著しいようで、最近まで札幌周辺で生息していた鳥で今日ではもう見られない種類もあると思われませんが、実態はほとんど分っておりません。

イギリスでは Common Birds Census という鳥類の個体数調査が、全国的かつ大規模に行なわれてきており

その結果からあらゆる種類の鳥の個体数変動や分布の動向などが適確にとらえられています。この調査と同じ内容と規模といかなくても、札幌周辺の鳥類相の現状をつかめるような調査の必要性を痛感している一人なのですが、これこそ個人でやるよりも、500人近くの会員を擁するまでに成長した本会のような会の同好者が結集してやる方が格段の成果が得られるのではないかと考え、その実施を呼びかけるものです。

とりあえず、減少の激しい草原性の鳥類を対象にしていくことにしたらよいと思いますが、調査地、方法、時期、回数などは期日を改めて話しあうことにしたらどうでしょうか。

探鳥会や観察会を通じて涵養した知識をフルに活用して、いわば自分の楽しみから鳥のおかれているきびしい状況を社会に訴えていくことも、単なる鳥類愛好者の域を越えて今日ほど必要な時期はないのではないのでしょうか。もちろんこの調査に当っては、**年齢、職業、経験などは一切不問とし、誰もが参加できるやり方を作りたい**と思います。私自身の住まいの関係から札幌周辺の調査を呼びかけましたが、道内各地で同様な調査がなされれば更に有力な資料が得られることになるので、**他地域での賛同者の参加も呼びかけます。**

なお、2月中旬から4月10日頃まで調査のため本州に出向くことになっているので、**参加を希望されます方は下記宛お知らせ下さい。**

〒238 横須賀市東逸見町2-69 小川 巖

話合いの期日等につきましては、3月下旬に追って連絡する予定です。

(北海道大学農学部応用動物学教室・大学院生)

《事務局だより》

☆ あけましておめでとうございます。(もうおそいかな?) 今年もどうぞよろしくお願ひします。

雪の少ない地方が多いようです。レンジャクやイヌカが多いようです。

寒さを苦にしない人にとっては、この冬は野外に出るチャンスです。カゼなどひかぬよう、がんばりましょう。

☆ 10ページに書いたように、財政がピンチです。本誌の印刷費は1回数万円かかるので、450人の

会員がいるとして、一人約150円の負担になる計算です。

年会費300円という分に不相応なことをやっているわけで、いままでは道庁の買上げなどでなんとか切抜けてきましたが、もう限界です。

活動を縮小しないためには、会費を値上げするしかないでしょう。残念ですがご理解いただきたいと思ひます。

☆ 14号の原稿は3月25日までにお寄せください。送り先は事務局(道庁自然保護課内:札幌市中央区北3西6 TEL 231-4111-内線 3895)まで。